

〔学会〕 第17回 千葉県胆膵研究会

日 時 : 平成8年6月29日(土) 午後2時30分~6時20分

場 所 : ホテルニューツカモト

1. 拡大右葉切除術後の胆道狭窄で難渋している小児肝芽腫の一救命例

齋藤 武, 真家雅彦, 江東孝夫
東本恭幸, 吉澤穰治
(千葉県こども・外科)
堀江 弘 (同・病理)

症例は11才の男児。主訴は出血性ショック。'94年11月25日肝芽腫破裂で発症し画像上S5, S6を占める巨大な腫瘍と腹腔内出血を認めた。発症後5日め、拡大右葉切除術を施行したが、術中左肝管の一部を損傷し左肝管ドレナージを付加した。病理組織学的には高分化型肝芽腫であった。術後19日め外瘻チューブの抜去を試みるもチューブが断裂し、遺残カテ抜去、肝管再吻合術を行った。その後、肝管吻合部のリークを認めたため、計7クルの化学療法後、'95年11月15日肝空腸吻合術を施行した。'95年12月、一時退院するも黄疸で再入院。Roux-Y脚の通過障害を疑いRoux-Y脚再建術を施行した。しかし、ビリルビンは低下せず、画像上肝空腸吻合部の狭窄を認め、'96年4月3日PTCDチューブを留置した。今回、我々は皮下埋め込み式の8Fr胆道内外瘻ステントチューブを挿入した。約2~3ヶ月留置した後、抜去しようと考えている。

2. 小児胆道疾患におけるMR cholangiopancreatographyの経験

黒田浩明, 高橋英世, 大沼真躬
田辺政裕, 岩井 潤, 吉田英生
(千大・小児外科)

当科においては先天性胆道閉鎖症、先天性胆道拡張症などの小児胆道疾患にたいし、ERCPなどの造影検査をおこない膵胆管系の形態の研究を行って来た。今回ERCP等、造影検査とともにMR cholangiopancreatography以下MRCPを施行し両者を比較し得たI cyst型胆道閉鎖症、乳児肝炎、囊腫型先天性胆道拡張症症例を経験したので報告する。いずれの症例においても、MRCPは胆管膵管系を自然な位置で立体的に抽出する事が可能で、小児胆道疾患に於ける合流形態の解析に有用な情報が得られると考えられた。また、MRCPは膵胆管の情報を非侵襲的に得ることが可能で

あり、MRIの性能向上により、さらに有用な情報が得られると考えられた。

3. 先天性胆道拡張症に合併した胆管癌の15才女児例

栗山 裕, 川村健児, 榎本秀樹
(松戸市立・小児外科)

症例はSturge-Weber症候群を有する15才女児。9才時に先天性胆道拡張症と診断されたが、手術を希望せず。今回超音波にて胆管腫瘍を発見され、手術を希望。CA19-9, SPAN-1, CA-50の上昇、CTでのcontrast enhancementより、先天性胆道拡張症に合併した胆管癌の診断にて手術を施行した。腫瘍は中部胆管後壁に発生し、腹膜播種、胆・膵・腎浸潤はなく、通常の肝外胆道切除、胆管空腸吻合術で切除可能であった。総胆管内アミラーゼ値は22,300 IU/Lであった。組織は高分化型管状腺癌で、n(-), s1, Ginf1のStage IIで肉眼的治癒切除であった。文献的に検索しえた範囲で、本例は先天性胆道拡張症に胆道癌を合併した第3番目の年少例である。先天性胆道拡張症では、20才未満の胆道癌合併例が相次いで報告されており、小児例でも癌化予防のため、早期に胆道切除を行うべきである。

4. 超音波映像下組織生検により診断された膵体尾部腫瘍形成性膵炎の1例

山口和也, 高橋 淳, 小山秀彦
長門義宣, 仲野敏彦, 野口武英
伊藤文憲, 大野孝則
(船橋中央・内科)
大久保春男 (同・病理)
山口武人, 税所宏光
(千大・一内)

臨床的には腫瘍形成性膵炎は、膵癌との鑑別に大きな意味を持ち、また一般的に頭部に多い。今回我々は超音波映像下組織生検により診断された膵体尾部腫瘍形成性膵炎の一例を報告する。症例は57歳女性。健康診断の超音波検査上の膵体尾部腫瘍を疑われた。US, CT, ERP, 腹部血管造影の各画像検査上、悪性所見は認めなかったが、悪性を完全には否定できず、超音